

紅の花

『万葉集』には、衣裳の色、四季折々に変化する景色の色など、多種多様な色名の詠まれた歌がみられ、当時の人々が多彩な空間のなかで生活していたことがわかります。そのなかでも、赤色系統の代表格だったのが紅色です。

『万葉集』で紅くれない（久禮奈為、呉藍とも表記）を詠んだ歌は三十四首ありますが、そのほとんどが紅花で染めた紅色を詠んでおり、植物としての紅花を



紅花の畑（三重県甲賀市）

詠んだものは二首にとどまります。

外とにのみ 見みつつ恋こひなむ 紅くれないの
未摘花よそぎの 色いろに出いでずとも

（巻十一—九九三）

紅くれないの 花はなにしあらば 衣ころも手に 染そめ
めつけ持ちて 行くべく思おもほゆ

（巻十一—二八二七）

一首目は、余所にて見ながら恋い慕って、紅の末を摘まれる花のように色に出さなくても、というように秘めた恋を詠んだ歌。染料となる花びらが枝の先端につくことから、ここでは紅花のことを「紅の未摘花」と詠んでいます。二首目は、もし恋人が紅の花であったら、自分の衣の袖に染めつけて持って行こうと思われぬのに、というように離れがたい気持ちを詠んだ歌。

いずれも紅花が染料になるという特性を踏まえた表現になっています。ちなみに紅花は薬用や食用（種子から油も採れます）としても生活に役立ちます。「くれない」の語源が、呉（古代中国にあつた国名）の藍（染料となる植物全般）であることからわかるように、紅花は元来日本に自生する植物ではなかったようです。いつ渡来したのか定かではありませんが、藤ノ木古墳（奈良県生駒郡斑鳩町）の石棺内に多量の紅花の花粉が検出したことから、六世紀後半には栽培されていたと考えられています。

平安時代、在原業平は「ちはやぶる神代もきかず龍田川韓紅くれないに水くくるとは」（『古今和歌集』秋歌下、二九四）という歌を詠みました。百人一首にも選ばれている名歌です。この韓紅という言葉は面白く、韓（中国・朝鮮半島）からもたらされた紅色という意味になるのですから、「くれない」の「くれ」とほぼ同義です。時代を経ても人々は、紅色に中国や朝鮮半島とのつながりを感じ続けていたのではなからうでしょうか。

（万葉文化館主任技師・小倉久美子）